

じゆうのともしび

自由燈

『東京朝日新聞』の前身紙

復刻版

紙名の変遷

自由燈

明治一七年五月二日〜明治一九年一月二三日
(第1号〜第458号)

燈新聞

明治一九年一月二四日〜明治二〇年二月二五日
(第459号〜第770号)

めざまし新聞

明治二〇年四月一日〜明治二二年七月八日
(第771号〜第1075号)

東京朝日新聞

明治二二年七月一〇日〜
(第1076号)

全一三卷+別巻一(全4回配本)

揃定価 380、000円+税

解説 松尾章一

推薦 安在邦夫・色川大吉・谷川恵一・土屋礼子

めざまし新聞



空して私共しかたは然らずにたしむるこ
とこれと申すも御前さまか
ら御用の御付られませ

帝国議会開設前夜
大衆に向けて社会平等論と

自由民権論を唱え

闇夜を照らした

小新聞の誕生から終焉まで

燈



先づ御前さまに申し上げますと、御覧察願ひ上げま
そ次第でございます。それより私方はか

不二出版

自由民権運動収斂期の諸問題を 読み解く基本・不可欠史料の刊行

安在邦夫 早稲田大学教授

自由民権運動の全体史を描こうとする場合、その位置付けが最も困難なのが自由党解党（一八八四年）から議会開設（一八九〇年）までの時期である。研究史上同時期については、解体・敗北・終息・退潮、あるいは再生などとして把握されてきているが、その複雑な諸相を検証し歴史的な位置を付与する用語として、最近私は「収斂」という語が適切なのではないかと考えている。具体的には壮士の分析を試みているが、作業を進める中でこの時期の諸問題を読み解く基本・不可欠な史料とあらためて強く認識するのが『自由燈』であり、その改題紙としての『燈新聞』『めさまし新聞』である。

当該期、官憲は「災を未然に防ぐ」ことを理由に、過激論者・政府批判者のみならず、「政談を好む者」や「免職官吏」までも危険視した。言論抑圧が頂点に達する中、政府の施策に果敢に抗したのが前掲三新聞であり、そのために新聞はたびたび発行停止に遭い、発行元の見光社は家屋・印刷機械から人事・負債状況に至るまで内債を受けた。新聞に見られる論調や紙面の構成・内容の振幅と、一貫して自由民権の課題を追求し続けた姿勢の構造の中に、自由民権運動収斂期の問題を解く鍵がある。その解明は、国家の論理が強大・顕著化する一方で、新聞が社会の木鐸としての機能を喪失している現在の課題を照射することにもなる。三新聞の復刻刊行はまさにタイムリーな企画である。その完成を鶴首して待つとともに、本新聞が多くの人に読まれることを期待したい。

（あんざい・くにお）

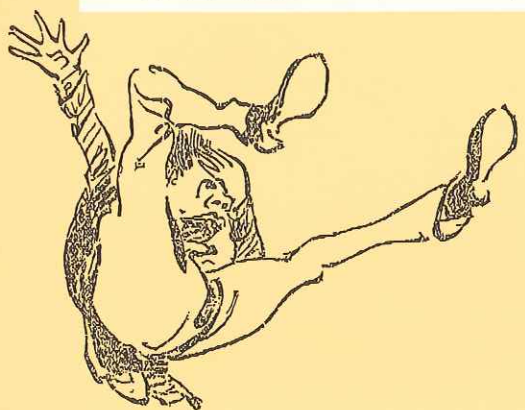
時代と対話する愉しみ

谷川恵一 国文学研究資料館教授

私が学生のころ、はじめて東京の明治新聞雑誌文庫に足を運び、そこで見た明治の新聞や雑誌は、どれも個性的な顔立ちをもち新鮮な驚きに満ちていた。ことに、明治十年代後半に登場した、『絵入自由新聞』や『自由燈』などの、自由党系の小新聞は、何段もぶち抜いた挿絵を配した斬新な紙面の作りにひきいられ、雑報や広告に至るまで、読んでいて時間のたつのを忘れた。私の知らなかったさまざまな事実や噂や物語がそこにあつたというだけでなく、それらをすべて含み込んで動いている時代の空気に触れたという実感があつた。

いまさらいうまでもなく、自由民権運動はまた文化運動でもあり、その一翼を担った『自由燈』などの新聞は、さまざまな報道のためのメディアではなく、運動の中から育まれてきた、時代と通いあいそれを変革しようとする新しい文化の実践である。そこは、日本の芸者とロシアの虚無党員が同居し、堅苦しい翻訳語と市井の俗語とが混在する、今日でも読む者を挑発してやまない不定形で危うい世界だった。ともすれば運動に関する情報を取り出すことに専念しがちであつたこれまでのスタンスを見直し、そこでわれわれを待ちかまえていた多様なことばや図像と向き合い、それらと語り合うことは、民権期のみならず、近代日本の文化と文学を考える上で、今後も避けて通れない作業になるだろう。

『自由燈』には、小室案外堂と宮崎夢柳という、絶頂期を迎えつつあつた二人の書き手の政治小説が載っている。それらを、もう一度全体の紙面——おそらく我が国ではじめて女性を読者として明確に意識しつつ編集された『自由燈』の紙面——の中で読み直す試みをしたと思う。（たにかわ・けいいち）



す ま し 推 薦

待望していた民権派大衆新聞

色川大吉 歴史家

私たち研究者にとつても容易に見ることのできなかった幻の存在『自由燈』や、その弾圧された後の継続紙『燈新聞』『めさまし新聞』がこんど復刻された。なんとという嬉しいことだ。これらの新聞はいまの読者も読んで元氣のである新聞だ。これらの復刻によって明治前期のジャーナリストの氣骨をいまの言論人や知識人に伝えることができる。その点でもまことに時宜を得た企画だとおもう。この国の大事なときに右傾化する時流に迎合し、反骨、氣骨を失って危険な情況を増幅させつつあるマスコミ関係者に奮起してもらいたいからだ。

たとえば明治十七年十一月、武装蜂起した秩父の困民党軍を『自由燈』は、「鮮血染出す、自由の魂」と大書した蓆旗をなびかせた挿絵つきで報道している。たてまえの解説では「暴挙」「暴動」と批判的に書いていながら、記事の本身は民衆に同情的で、ヒーロー新井周三郎（甲大隊長）などの不屈な人間像を詳細に伝えたりしている（明治十八年二月十九日）。

これらの自由党系の新聞の発行者、維持者は星亨であるが、『自由新聞』時代からともにその維持普及に尽力していた加藤平四郎は、過酷な弾圧下に抵抗の機関紙を維持できたのは星亨の力によるものだったと証言している。星が資金を提供した『自由燈』も『めさまし新聞』も『自由新聞』の後継紙であり、これが停刊に追い込まれたのも明治二十一年二月、星が出版条例違反で投獄されたことによるとしている。当時の言論弾圧とそれとの闘いがいかに凄まじいものであつたか、私たちはこれらの資料によってあらためて鼓舞される。

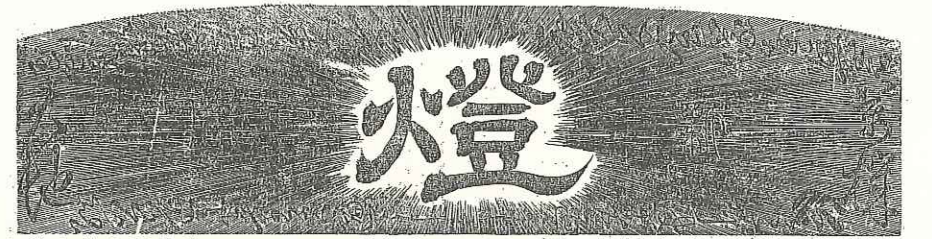
（いろかわ・だいきち）

通俗とエリートを架橋した

政党系小新聞の代表

土屋礼子 大阪市立大学教授

『自由燈』は短命な新聞であつた。明治十七年の創刊から、『燈新聞』『めさまし新聞』と改題し、明治二十一年に大阪の朝日新聞社に買収されて『東京朝日新聞』に変身するまで、わずか四年ほどである。にもかかわらず、この新聞が日本のメディア史において重要な位置を占めるのは、明治前期には知識人向けの大新聞と庶民向けの通俗的な小新聞（こしんぶん）に分かれていた新聞の二つの層が融合し、中新聞化していくという、大きな流れを明確に体現しているからである。挿絵入り絵ふりがな付きの小新聞である『自由燈』は、自由党機関紙であつた大新聞の『自由新聞』と並んで、党公認の新聞であつた。その編輯には、仮名垣魯文門下の若菜貞爾、斎藤緑雨など戯作に親しんだ平民出身記者と、宮崎夢柳や小室信介、坂崎紫瀾などの士族出身の自由党員とが協力していた。彼らは海外通信員の派遣、口語的表現を用いた論説、フランス革命やロシアのアナーキストを題材にした連載小説の掲載など、それまでの小新聞の枠を破る試みを展開した。当時の『絵入自由新聞』『改進黨新聞』『絵入朝野新聞』などの政党系小新聞の中でも、その活動はバタ臭く急進的な精彩を放っている。この復刻版のなかに、私たちは自由民権運動と文明開化の理想と矛盾を背負いながら、時代の先端を切り開いていった人々の実践と苦闘の跡を読み取るとともに、身分を超えてひとつの国民となり新しい社会をつくらうとする強い意志を持って近代化をリードした、新聞というメディアの若々しく潑刺たる姿を見るのである。（つちや・れいこ）



社告
本紙は、明治十一年一月二十日創刊。...

「燈新聞」内容見本 (復刻版紙面を縮小)

横浜活版社ほか刊 (明治三年〜明治三九年刊)
横浜毎日新聞 (全一四九巻・別冊二)

本紙は、明治三年、日本で初めての日刊新聞として創刊された。当初は貿易商況記事を主としていたが、政論新聞時代の展開と共に政治性を帯びていき、明治二年、編集局を横浜から東京へ移し、紙名も『東京横浜毎日新聞』と改め、民権派言論の一翼を担うに至り、俄然注目を集めた。日本近代史・政治史・社会史・文化史の研究等に必須の基礎的資料。

- 解説 門奈直樹・甘利璋八
- A4判/上製/59,010頁
- 揃定価 本体2,950,000円十税
- '89年5月〜'99年10月配本完結
- 推薦 内川芳美・北根豊十羽鳥知之十服部一馬



秋山定輔主筆 (明治二六年〜明治四二年刊)
一六新報 (全四八巻)

本紙は、藩閥政治反対を唱え、朝鮮問題や中国の動向に注目した独立の政論新聞であったが、いったんは経営難から休刊した。明治三年、再興された『一六新報』(第二次)は、三井財閥攻撃・娼妓自由廃業支援・労働者懇親会の開催など社会問題のキャンペーンに重点をおき、紙面を大衆向けに面白くし、かつ廉価販売によって、全盛時代を迎えた。

- B4判/上製/18,000頁
- 揃定価 本体960,000円十税
- '92年6月〜'96年6月配本完結
- 推薦 飛鳥井雅道十荒瀬豊十姜在彦十山本武利



「めざまし新聞」内容見本 (復刻版紙面を縮小)

めざまし新聞

社告
本紙は、明治十一年一月二十日創刊。...

見光社會計局
本局は、明治十一年一月二十日創刊。...

三井財閥攻撃
娼妓自由廃業支援
労働者懇親会の開催

毛利柴庵主筆 (明治三年〜大正九年刊)
牟婁新報 (全三三巻・補巻一・別冊二)

明治三年、和歌山県田辺市で毛利柴庵によって創刊された本紙は、県内外から多くの革新的思想家たちが寄稿し、平民社落城後の初期社会主義の砦ともいべき存在となった。世界的な民俗学者・博物学者として知られる南方熊楠が健筆を揮って、柴庵とともに環境保全・自然保護の問題に取り組んだこともその大きな特色である。エコロジー運動のさきがけとしても貴重な資料。

- 解説 門奈直樹十武内善信十中瀬喜陽
- B4判・A4判/上製/11,424頁
- 揃定価 本体934,000円十税
- '01年5月〜'06年1月配本完結
- 推薦 赤松徹真十高嶋雅明十鶴見和子十中瀬喜陽十堀切利高



◎復刻版概要

自由燈

全一三巻十別巻一

一八八四(明治一七)年五月〜一八八八(明治二一)年七月
B4判/上製/総4、200頁

別巻 卷II 解説(松尾章一)・主要記事索引/A4判上製/380頁
(別巻のみ分売可 本体16、000円十税)

ISBN4-8350-5710-4

原紙提供 朝日新聞社

刊 行 2006年6月〜2007年3月

揃定価 本体380、000円十税

推 薦 安在邦夫(早稲田大学教授)

色川大吉(歴史家)

谷川恵一(国文学研究資料館教授)

土屋礼子(大阪市立大学教授)



◎配本概要

第1回配本 2006年6月刊 自由燈

第一巻 明治一七年五月〜一七年七月(1号〜65号) 264頁

第二巻 明治一七年八月〜一七年二月(66号〜151号) 372頁

第三巻 明治一八年一月〜一八年三月(152号〜222号) 284頁

ISBN4-8350-5693-0 セット価格 本体84、000円十税

第2回配本 2006年9月刊 自由燈

第四巻 明治一八年四月〜一八年六月(223号〜299号) 310頁

第五巻 明治一八年七月〜一八年九月(300号〜377号) 312頁

第六巻 明治一八年十月〜一八年一月(378号〜458号) 324頁

ISBN4-8350-5697-3 セット価格 本体84、000円十税

第3回配本 2006年12月刊 燈新聞

第七巻 明治一九年一月〜一九年四月(459号〜547号) 356頁

第八巻 明治一九年五月〜一九年八月(548号〜634号) 340頁

第九巻 明治一九年九月〜二〇年二月(635号〜770号) 398頁

ISBN4-8350-5701-5 セット価格 本体84、000円十税

第4回配本 2007年3月刊 めさまし新聞

第一〇巻 明治二〇年四月〜二〇年八月(771号〜852号) 338頁

第一一巻 明治二〇年九月〜二〇年二月(853号〜918号) 268頁

第一二巻 明治二一年一月〜二一年三月(919号〜991号) 296頁

第一三巻 明治二一年四月〜二一年七月(992号〜1075号) 338頁

別巻 解説・記事索引

ISBN4-8350-5705-8 セット価格 本体128、000円十税

●今回の復刻にあたっては、朝日新聞社にご協力いただき原紙の提供
を得ましたが、以下の号が未見のため欠号となっております。
お心あたりの方はぜひ小社までご一報下さい。

欠号 624号、625号、649号、及び679号〜715号

表示価格は全て税別

不二出版(株)

〒113-0023

東京都文京区向丘1-2-12

TEL(03) 3812-4433

FAX(03) 3812-4464

振替00160・294084